

# 部屋の用途や構造が座席選択行動に与える影響

## ―場面の種類と出入口の位置に着目して―

山内 裕斗\*・高橋 亨輔\*\*・小野 史典\*\*\*

The influence of room purpose and structure on seat choice  
– Focusing on the type of situation and the position of the doorway –

YAMAUCHI Hiroto\*, TAKAHASHI Kyosuke\*\*, ONO Fuminori\*\*\*

(Received September 22, 2022)

本研究では、友人などの他者と一緒にいる状況ではなく自分一人での状況ですべての座席が空席であることを想定した場面を設定し、出入口の位置と教卓の有無を操作したうえで、座席選択の志向性が、出入口の位置と教卓の有無によって異なるか否か、また、座席選択の志向性とパーソナリティとの関連について、182名の協力者のもと、Web調査を行った。調査の結果、出入口の影響がある群の人数は教室よりも自習室の方が多く、出入口の影響がない群は自習室よりも教室の方が多かった。また、教室においては、出入口の影響なし群よりも出入口の影響あり群の方が、神経症傾向、視線による不安・恐怖が高い傾向にあることが示された。座席選択行動が、出入口の位置や教卓の有無といった部屋のつくりや用途の違いによって影響を受けること、その影響の度合いが選択者のパーソナリティによって異なる可能性が示唆された。

### 問題

我々の日常生活は選択の連続であり、その選択は様々な要因から影響を受けると考えられる。座席選択もその一例であり、場面としては教室や乗り物、飲食店等の様々なものが想定できる。これまで学生を対象にした座席選択の研究は複数行われており、前方に座る者は、成績がよく、よい成績を取るために努力していること、教員に対する評価が高く積極的に講義に取り組むなど学習意欲が高いこと、対人距離が小さいことなどが示されている一方、後方に座る者は、成績はわるく、努力も怠っており実力を出し切れていないということ、学習意欲や自主性、授業への関心が低く、教員の指導内容に対する評価も厳しいこと、対人距離が大きいことなどが示されている(川西、2006；北川、1984；北川、1998；下鶴・中野、2008)。濱島・城(2001)によると、好みの座席位置が前方か後方かという基準では授業に関する要因(前方では集中できる、後方では目立たない、など)、右側か左側かという基準ではその場所のもつ特性(窓側だと暖かい、ドア側であれば何かあったときに

ていきやすい、など)がかかわっている。大講義室での講義形式の授業で座席選択の自由度が大きい場合では、前後方向では中間部、左右方向では両端の窓側が好まれる傾向にあり、最前列や最後列の端や中央は忌避される傾向にあること、さらに最前列や最後列の端の中でもドアに近い側の端は避けられる傾向にあることが示されている(北川、1980；北川、1984；矢澤、2002)。

座席選択とパーソナリティについて、岡村・大井(2018)は、座席選択の傾向とBig Fiveの関連について、教室型のレイアウトにおいて前方の座席を選択する人は開放性と勤勉性が高いことを示している。北川(1980)はYG性格検査と座席選択の関連を調べ、座席が前方の学生は、抑うつ性、神経質、回帰性、主観性、攻撃性が低い一方で、後方の学生は抑うつ性、神経質、回帰性、主観性、攻撃性に加え、のんきさや衝動性も高く、非協調性と劣等感がやや高い傾向にあることを示した。同様の調査では、前後両端の学生は社会的外向が高く、前後中央の学生は社会的外向が低くなり、左右中央の学生は、抑うつ性、非協調性が低く、社会的外向が

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科 \*\* 関西医療大学教育学部 \*\*\* 山口大学教育学部、〒753-8513 山口県山口市吉田1677-1、fuminori@yamaguchi-u.ac.jp

高い一方、左右両端の学生は、抑うつ性、非協調性が高く、社会的外向が低くなることも示されている(北川、1980)。このように、教室で後方の席を好む者に対してはネガティブな見解が多々見られるものの、「身体が大きいために前に座ると迷惑になる」「教員に指名されたり見られたりするのが嫌だからうしろに座りたい」「視力に関して不安や課題があるために前方に座る」などの例外的理由から座席を選択する者もいることが考えられる。さらに、前方の座席を選択する人よりも後方を選択する人の方が学習時に周りの視線を意識するような傾向があったという報告もある(岡村・大井、2018)。一般的に、教室で前方に座ると前からは教員に見られ、後ろからは他の受講生に見られることになる一方で、後方の席に座ると教員からは見られるが比較的距離もあり、逆に自分の前方に座っている人が視界に入るといった状況になる。山内・田邊(2021)はパーソナリティと周りを見ることとの関連から、周りの様子を見ている人は、周りの状況に関心があり場面に適した振る舞いを心がけるため、ミスや失敗を回避する意識が高いのではないかという考察、また同様に、周りの人を見ている人は、人に親しみがかり接近する一方で、相手のことを完全には信頼せず自分を調節している可能性がある、と述べている。学生は前方や中間部の席や教師との視線の交錯が多い中心部と前列を結ぶ「中央の三角域」は好まず、避ける傾向にあるという知見からも(濱嶋・城、2001)、他者から受ける視線や、普段から周りの人や様子を気にしているかなどの特性も座席選択にかかわってくるものが予想される。

では、同じ「教室」という場面でも、教員が存在しない「自習室」ではどうだろうか。ここでは前方に立つ教員のような人物との視覚的接触は存在せず、自分の課題に取り掛かるだけである。基本的には私語もなく静かな場所であることが多く、友人と行うよりは一人で行うことの方が多くことも予想される。このような場面で座席選択を行う際には、教員が存在する教室とどのような違いが見られるのだろうか。さらに、学習をするような教室や自習室のみならず、乗り物に乗るときでも我々は座席選択を行う。その際にも、教室や自習室のように前方や後方などを考えたうえで選んでいるのだろうか。

このように、座席選択については様々な場面が想定されるが、これらの公共的な場面で座席を選ぶ際、異なる場面を比較して共通点や類似点を調べた研究はなされていない。また、場面全体を想定した際の前方や後方などの範囲の選択と、より細かな場面を想定した際の窓側や通路側などの位置の選択についても、共通点や類似点を調べた研究は見受けられない。加えて、実際の講義での着席行動を記録し調査している研究では、教室に入るとき

にはすでに他の受講生が着席しており、空いている席に座る、または、友人と近くの席に座るということが生じ、本来着席しなかった席に座っていない可能性も考えられる。さらに、これまでの研究でも出入口付近は好まれないという結果は報告されているものの、座席の配置や窓、エアコンの位置などのその他の要因についての統制が取られて比較している研究は見受けられない。

そこで本研究では、友人などの他者と一緒にいる状況ではなく自分一人である状況で、すべての座席が空席と想定した場面を設定し、前方・後方、窓側・通路側など類似した要因が想定される「教室」「自習室」「新幹線」の3場面を設定した。このうち、「教室」「自習室」については出入口の位置を操作した条件を、新幹線については進行方向を変えることで2人掛けと3人掛けの席の位置を操作した条件を設けた。しかし、今回取り上げた3つの場面ではそれぞれ利用する際の目的が異なる。教室では授業を受けること、自習室では自習を行うこと、新幹線では移動をすること、が主な目的である。そのうえで、座席を選択する際にはこれらの目的がより快適に満たされるように座席選択をすることが想定される。これらを踏まえたうえで、本研究の目的を以下の2点とする。

- ①部屋の用途が異なる、教室、自習室、新幹線という3つの場面において、座席選択の傾向を検討する。
- ②教室と自習室において、出入口の位置の操作による座席選択の傾向の変化とパーソナリティとの関連を検討する。

## 方法

2020年秋季にWeb調査を行い、182名(男性62名、女性118名、その他2名、平均年齢23.87歳、SD=6.58、利き手が右手161名、左手13名、両手8名)が調査に参加した。参加者は大学生が多かったものの対象は限定しておらず、18歳から58歳までの年齢の幅があった。参加者はSNSを利用し、調査者の知人や、その知人の紹介を頼りに募集した。倫理的配慮として、調査フォーム冒頭の説明文に「研究実施計画」「研究に参加することによる利益、不利益、危険性」「プライバシーおよび個人情報の保護」「同意及びその撤回」の4点について説明を行い、個人情報を保護し、最大限の配慮をしたうえで、学術学会や学術学会誌に公表することを説明した。参加者が「同意」を選択したことで、調査協力への同意とみなした。また、回答は一人一回のみとするため、複数回の回答は控えるよう依頼した。フェイス項目として性別、年齢、利き手を尋ねた。その後、後述の座席選択場面と、座席選択の基準、パーソナリティ特性について尋ねた。座席選択場面では、「この質問は、乗り物(教室/自習

室)であなたの選ぶ位置についてお尋ねするものです。以下の乗り物(教室/自習室)に一人で乗る(座る)際に、どの位置に最も座りたいか、選んでください。どの場面においても、自分より先には人が座っていないという状況をイメージして答えてください。」と教示したうえで回答を求めた。座席選択として設定した場面、および使用した尺度は以下の通りである。

・座席選択として設定した場面

座席選択として「進行方向に対して左側が3人掛け、通路を挟んで右側が2人掛けで、縦に19列、乗降口は座席からは見えず、前方後方それぞれにある新幹線」「進行方向に対して左側が2人掛け、通路を挟んで右側が3人掛けで、縦に19列、乗降口は座席からは見えず、前方後方それぞれにある新幹線」「3人掛けの机で通路を挟んで横に3列、縦に10列、出入口が前方の両端に2箇所ある教室」「3人掛けの机で通路を挟んで横に3列、縦に10列、出入口が後方の両端に2箇所ある教室」「3人掛けの机で通路を挟んで横に3列、縦に10列、出入口が前方の両端に2箇所ある自習室」「3人掛けの机で通路を挟んで横に3列、縦に10列、出入口が後方の両端に2箇所ある自習室」を設定した(図1~6)。これらの場面は、大学の講義室の種類を第一筆者と第二筆者で包含した後、少人数ではなく大人数を収容可能な教室で、4人掛けよりも右・中央・左が明確な構造になっている3人掛けの座席に絞り、2名の協力者(いずれも女性、平均年齢22.50歳)に回答を依頼し、回答のしやすさや参加者への負担を考慮したうえで、再度3名の筆者で検討して場面を設定した。これらの場面のそれぞれにおいて、まず前後軸についてどの列を選ぶかをA~Dの中から回答を求め、その後左右軸についてa~e(新幹線)またはa~i(教室および自習室)の中から回答を求めた。それぞれの回答で“気にしない”および“回答しない”の選択肢も設けた。

これまでの研究では、すべての座席から任意の座席を選択してもらう方法や、座席を区画に分けて、選択してもらう方法が用いられている。しかし、任意の座席を選択してもらう場合、散らばりが莫大になることが考えられ、また、区画分けをする場合は、その区画の中のどの位置を選択するかが不明となるため、本研究では、縦が4列、横が5列もしくは9列の中から選択を求めることで、散らばりを可能な限り抑えて統制をとることを優先して、場面設定を行った。

・座席選択場面において、何を基準にして選んでいるかを尋ねる項目

新幹線、教室、自習室のそれぞれで座席を選択するとき、何を基準にしているのかを調べるために「新幹線(教室/自習室)で着席する際、何を基準にして席を選

びますか。(複数回答可能)」と尋ねた。回答は“窓側”、“通路側”、“前方”、“後方”などの選択肢を設けた(表1~3)。

上述の「座席選択として設定した場面」では、新幹線、教室、自習室のそれぞれにおいて、コンセントの場所や、大きな荷物を持ち合わせているかどうか、教育教材の見やすさ、少人数での授業による小さな教室、などの要因については特に記載していないため、回答者の座席選択の判断基準を詳しく尋ねるために、“その他”の欄には自由に記述できるような欄を設けた。選択肢は、3名の著者で検討して設定した。

・日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)  
(小塩・阿部・カトローニ、2012)

「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」の5因子、各2項目の計10項目で構成されている。回答は“強くそう思う”から“全く違うと思う”の7件法であった。この尺度は10項目で構成されているため、調査での項目数を可能な限り減らし、回答者の負担を低減させることが可能であり、簡便にパーソナリティを測定できると判断したため、TIPI-Jを採用した。

・視線に関する不快感情尺度(山内・小野、2019)

「不安・恐怖」と「イライラ」の2因子、各6項目の計12項目で構成されている。本研究では「不安・恐怖」因子の6項目を採用した。回答は“当てはまる”から“当てはまらない”の5件法であった。新幹線や教室、自習室では他者の目に触れることになり、他者の視線に関して、5因子のパーソナリティ特性以外の特性を測定することが可能であると判断し、視線に関する不快感情尺度を採用した。

・周りを見ている程度を尋ねる項目

座席選択時だけでなく普段からどの程度周りを見ているかを尋ねるため「普段から周りの様子を見ていると思う」「普段、周りの人をよく見ていると思う」の2項目を追加した。これらの項目は山内・田邊(2021)の研究でも用いられており、他の尺度との関連も見られている。回答は“強くそう思う”から“全く違うと思う”の7件法であった。

なお、本調査は山口大学の倫理審査委員会の承認を得たうえで行った(承認番号:2020-030-01)。

結果

統計的な解析について、統計学的有意水準は5%とした。分析ソフトはR(version 4.0.2)を用いた。新幹線、教室、自習室で、選択された座席の割合を図1~6に示す。進行方向や机の向きは図の上方を前方とした。図の右側欄外は、前後軸については選択したが左右軸については“気にしない”とした回答者の割合である。同様

に、図の下側欄外は、左右軸については選択したが前後軸については“気にしない”とした回答者の割合である。図の右下欄外は、前後軸および左右軸の両方において“気にしない”とした回答者の割合である。なお、各割合は単位を%としたとき的小数第2位を四捨五入して示している。

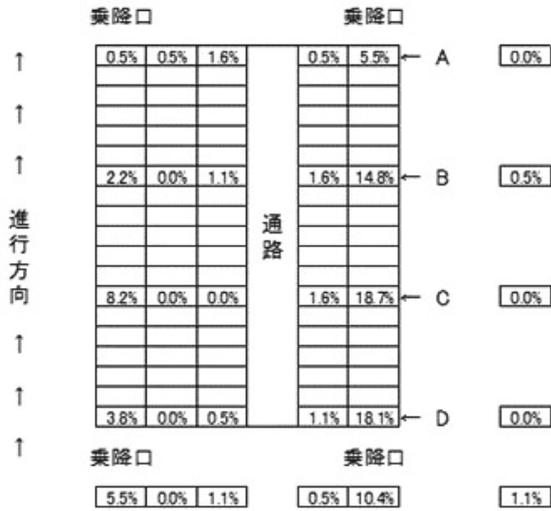


図1 左側が3人掛けで右側が2人掛けの新幹線で選択された座席の割合

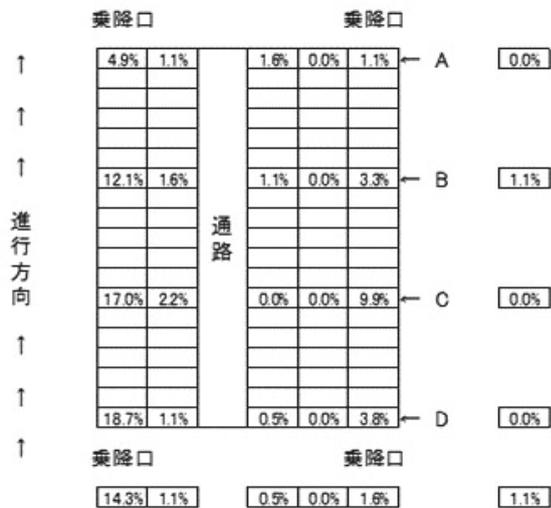


図2 左側が2人掛けで右側が3人掛けの新幹線で選択された座席の割合

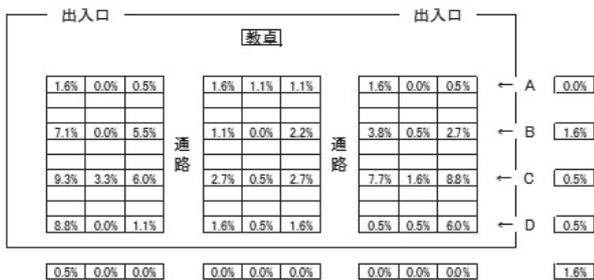


図3 出入口が前方の教室で選択された座席の割合

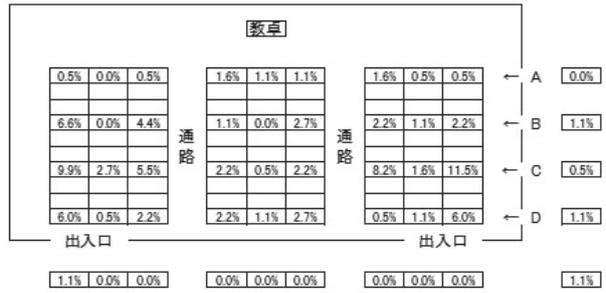


図4 出入口が後方の教室で選択された座席の割合

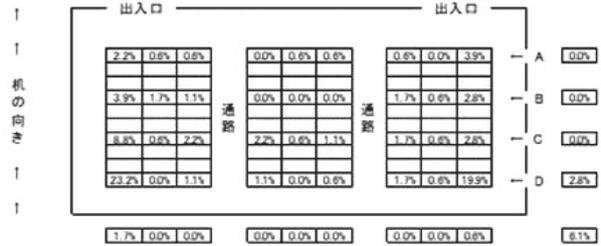


図5 出入口が前方の自習室で選択された座席の割合

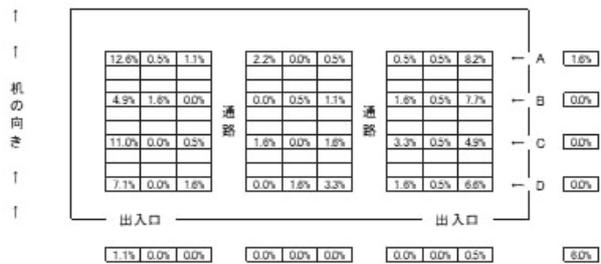


図6 出入口が後方の自習室で選択された座席の割合

また、新幹線、教室、自習室での座席選択について、何を基準に選んでいるかという質問に対する回答を表1～3に示す。これらの質問は複数回答を可能としている。

座席選択の基準において、新幹線、教室、自習室の場面でどのような席が好まれやすいかを比較検討するため、部屋の中で対称になると考えられる、①窓側・通路側、②前方・後方でそれぞれクロス集計し $\chi^2$ 検定を行ったところ、いずれも $p < 0.01$ で有意差が認められたため(①( $\chi^2(2)=29.73$ )、②( $\chi^2(2)=12.29$ ))、それぞれで残差分析を行った。その結果、教室は、自習室および新幹線と比べて通路側が好まれ、新幹線は、教室および自習室と比べて通路側よりも窓側が好まれることが示された。また、自習室は、教室および新幹線と比べて前方よりも後方が好まれることも示された。

それぞれの“その他”の回答について、新幹線では「トイレの位置(4名)」「喫煙スペースの位置」「コンセント(電源)の有無(2名)」「スーツケースなど荷物置き場の利便性(2名)」「後ろに人がいない(席が倒せる)」「3人席の方が座席が広い気がする(2人席よ

り3人席が良い」「混んできたとしても隣に座られづら  
 そうな席（2人席より3人席の方が隣に来づら  
 と思う）」「海側の景色が見える席や、太陽の向きで考  
 える」「パソコンが使える机」「短距離であれば出やすい  
 通路側、長距離であれば窓側。大きな荷物があれば出入  
 口付近」などが挙げられた。教室では、「パワポの授業だ  
 と前側にいると板書が大変なので後ろ側。前側しか明か  
 りを消さない教員が多くて書きやすいのと、首が疲れな  
 い」「すみっこで人の邪魔にならないところ」「目立た  
 ない場所」「黒板やスクリーンが見やすい正面の角度の  
 席」「机の端の席、スライドや黒板の見やすい席」「目  
 が悪いと、黒板の字が見やすいかどうか」「教卓や画  
 面が見えやすいポジション」「最前列」「前過ぎず後ろ  
 過ぎない、真ん中を避けた席」などが挙げられた。自習室  
 では、「出入りする人と目が合わないところ」「背後に壁  
 がある方が安心するので極力後ろ」「人にできるだけ見  
 られない席（座る人、通行人関係なく）」などが挙げら  
 れた。

表1 新幹線における座席選択の基準

選択基準	人数	割合
窓側	147	80.8%
通路側	20	11.0%
前方	15	8.2%
後方	31	17.0%
エアコン(空調機)の位置	9	4.9%
乗降口の位置	34	18.7%
近くに人がいない席	129	70.9%
気にしない	3	1.6%
その他	14	7.7%

表2 教室における座席選択の基準

選択基準	人数	割合
窓側	50	27.5%
通路側	36	19.8%
前方	29	15.9%
後方	82	45.1%
エアコン(空調機)の位置	24	13.2%
出入口の位置	53	29.1%
授業の内容	46	25.3%
近くに人がいない席	75	41.2%
気にしない	7	3.8%
その他	11	6.0%

表3 自習室における座席選択の基準

選択基準	人数	割合
窓側	52	28.6%
通路側	22	12.1%
前方	4	2.2%
後方	56	30.8%
エアコン(空調機)の位置	26	14.3%
出入口の位置	72	39.6%
自習する内容	12	6.6%
近くに人がいない席	121	66.5%
気にしない	16	8.8%
その他	5	2.7%

次に、教室および自習室において、出入口の位置を操  
 作した際の、前後軸での移動とパーソナリティとの関連  
 を検討した。座席選択の際の傾向（以下、「座席選択傾  
 向」とする）を分類するための群分けについて、教室と  
 自習室それぞれで出入口の位置の操作によって「出入口  
 に近づく群」「出入口から遠ざかる群」「出入口の影  
 響がなく移動しない群」の3群に分けた。この3群に  
 おいて、教室では順に47名、16名、119名、自習室では  
 25名、80名、76名であった。教室と自習室での出入口  
 の位置と座席選択傾向の特徴について検討するため、出  
 入口に近づく群・出入口から遠ざかる群・移動しない群  
 で $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $p < 0.01$ で有意差が認められ  
 たため( $\chi^2(2) = 58.869$ )、残差分析を行った。その結  
 果、出入口から遠ざかる群は、教室より自習室の方が多  
 く、出入口の影響がなく移動しない群は、自習室よりも  
 教室の方が多かった。

ここで、教室と自習室のそれぞれで「出入口に近づく  
 群」「出入口から遠ざかる群」「出入口の影響がなく移  
 動しない群」の3群でパーソナリティとの関連を  
 検討するには、人数の偏りがあり妥当ではないと判断し  
 たため、出入口に近づく群と出入口から遠ざかる群を合  
 わせた「出入口の影響あり群」（以下、影響あり群）と  
 移動のなかった「出入口の影響なし群」（以下、影響  
 なし群）の2群に分けることとした。群分けの際、教室  
 の「影響あり群」には出入口に近づく人の割合が多  
 く、自習室の「影響あり群」には出入口から遠ざかる  
 人の割合が多いという問題点を孕んでいるが、分析対  
 象の人数の偏りを減らすことを優先し、このような群  
 分けの方法を用いた。なお、自習室において“回答しな  
 い”を選択した参加者が1名いたため、教室および自習  
 室の分析対象者を182名、181名とした。教室では「影  
 響あり群」63名「影響なし群」119名、自習室では「影  
 響あり群」105名「影響なし群」76名となった。これを  
 基にして、座席選択傾向とパーソナリティとの関連を検  
 討するために、教室および自習室の両方において同様に、  
 座席選択傾向（参加者間、2水準）とパーソナリティ  
 （参加者内、5水準）の2要因分散分析を行った（表4、  
 5）。その結果、教室において、座席選択傾向の主効果  
 は認められなかったが [ $F(1, 180) = 0.397, p = 0.529, f = 0.047$ ]  
 、座席選択傾向とパーソナリティの交互作用  
 が認められた [ $F(4, 720) = 2.924, p = 0.020, f = 0.127$ ]  
 。単純主効果の検定の結果、影響なし群よりも影響あり群  
 の方が、神経症傾向が高いこと [ $F(1, 180) = 5.887, p = 0.016, f = 0.181$ ]  
 が示された。また、自習室においては、  
 座席選択傾向の主効果 [ $F(1, 179) = 0.052, p = 0.820, f = 0.017$ ]  
 、および、座席選択傾向とパーソナリティの交  
 互作用 [ $F(4, 716) = 0.910, p = 0.458, f = 0.071$ ] は認め

られなかった。なお、パーソナリティ因子得点は、7点  
が満点である。

**表4 教室における座席選択傾向と  
パーソナリティ因子得点の平均値**

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向*	開放性
出入口の影響あり群	3.47	5.00	3.00	4.87	3.64
出入口の影響なし群	3.60	4.96	3.39	4.35	3.96

\* $p < 0.05$

**表5 自習室における座席選択傾向と  
パーソナリティ因子得点の平均値**

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
出入口の影響あり群	3.50	4.93	3.34	4.61	3.76
出入口の影響なし群	3.63	5.03	3.14	4.43	4.00

次に、座席選択傾向と視線に関する不快感情の不安・  
恐怖との関連を検討するため、座席選択傾向における  
不安・恐怖の因子得点に対して  $t$  検定を行った (表6、  
7)。その結果、教室において影響あり群の方が影響  
なし群よりも不安・恐怖因子得点が高かった ( $t(159)$   
 $= 2.283, p = 0.024, g = 0.356$ )。自習室においては群間  
に差は見られなかった ( $t(144) = 1.033, p = 0.303, g =$   
 $0.156$ )。不安・恐怖因子得点は、5点が満点である。

**表6 教室における座席選択傾向と視線による  
不安・恐怖因子得点の平均値**

出入口の影響あり群	出入口の影響なし群	$t$ 値
3.392	3.091	2.283*

\* $p < 0.05$

**表7 自習室における座席選択傾向と視線による  
不安・恐怖因子得点の平均値**

出入口の影響あり群	出入口の影響なし群	$t$ 値
3.259	3.120	1.033

さらに、座席選択傾向と周りを見ている程度を尋ね  
る項目との関連を検討するために、教室および自習室  
の両方において同様に、座席選択傾向 (参加者間、2  
水準) と周りを見ている程度 (参加者内、2水準) の2  
要因分散分析を行った (表8、9)。その結果、教室に  
おいては、座席選択傾向の主効果 [ $F(1, 180) = 3.043, p$   
 $= 0.083, f = 0.130$ ]、および、座席選択傾向と周りを見  
ている程度の交互作用 [ $F(1, 180) = 1.133, p = 0.289, f$   
 $= 0.079$ ] は認められなかった。また、自習室において、  
座席選択傾向の主効果は認められなかったが [ $F(1,$   
 $179) = 0.440, p = 0.508, f = 0.050$ ]、座席選択傾向と周り  
を見ている程度の交互作用が認められた [ $F(1, 179) =$   
 $10.032, p = 0.002, f = 0.237$ ]。単純主効果の検定の結果、  
影響あり群において、周りの“人”よりも“様子”を見る傾  
向があることが示された [ $F(1, 104) = 8.878, p = 0.004,$

$f = 0.292$ ]。周りを見ている程度得点は、7点が満点で  
ある。

**表8 教室における座席選択傾向と  
周りを見ている程度得点の平均値**

	周りの様子を見る	周りの人を見る
出入口の影響あり群	4.905	4.937
出入口の影響なし群	5.351	5.202

**表9 自習室における座席選択傾向と  
周りを見ている程度得点の平均値**

	周りの様子を見る	周りの人を見る
出入口の影響あり群**	5.257	4.952
出入口の影響なし群	5.132	5.342

\*\* $p < 0.01$

### 考察

本研究の目的は、①部屋の用途が異なる、教室、自習  
室、新幹線という3つの場面において、座席選択の傾向  
を検討すること、②教室と自習室において、出入口の位  
置の操作による座席選択の傾向の変化とパーソナリティ  
との関連を検討すること、の二点であった。まず、目的  
①について、新幹線、教室、自習室では好まれやすい座  
席の位置が異なることが示された。新幹線は、教室や自  
習室に比べて窓側が非常に好まれており、また、近くに  
人がいない席を選ぶことも多かった。ここで図1、2か  
ら、特に3人掛けの中央を選択した割合は低いことや、  
2人掛け側の席を選択した割合が高いことが見受けられ  
る。今回設定した場面の中で新幹線は教室や自習室と異  
なり、3人掛けと2人掛けから選択できる状況となっ  
ており「自分一人での状況で、すべての座席が空席と想  
定した場面」では、2人掛けの方が近くに他者が座りに  
くいと想定されたと考えられる。加えて、新幹線での移  
動中はできるだけリラックスしやすい位置を好むのでは  
ないかと考えられるため、人の通行をあまり気にする必  
要がなく、窓からの景色を見ることもできる窓側の方が  
好まれるのだろう。これらは、座席選択の基準を尋ねた  
際に挙がった“その他”の「2人席より3人席の方が隣に  
来づらと思う」「海側の景色が見える席」「長距離で  
あれば窓側」という回答からも、支持できる。教室では  
新幹線や自習室と比べて通路側が好まれていた。教室で  
は教員がいるため、自習室や新幹線と比べて自分のペ  
ースで作業を行うことや、自分の都合に合わせて行動を変  
えること (例えばお手洗いや、授業や講演会の後に用事  
があって早く帰りたいときなど) は難しい。その点、教  
室で通路側に座ることは、自分の行動の自由度を確保し  
ていると考えることもできる。自習室では教室や新幹線

と比べて前方よりも後方が好まれることも示された。山内・安藤（2021）は「他人が勉強しているところを見る」よりも「自分が勉強しているところを他人に見られる」方が不快に感じることを示している。このことから、自習室は静かに自分の課題を行うような場所であり、自分が課題をしている姿を他者に見られたくないと考える傾向があると予想される。図3～6によると、教室では最後列よりも最後列から少し前の席の両端が好まれる傾向が見られ、自習室では出入口から遠い列の両端が好まれる傾向が見られた。また、自習室での何を基準に選んでいるかという質問からは、教室や新幹線と比べて前方よりも後方が好まれることが示されているが、出入口が後方の自習室では最前列の両端の座席も12.6%や8.2%と比較的高い値が示されている。これらのことから、授業を受ける目的がある教室では教卓（教員）との距離の影響が大きく、自習室では出入口の位置の影響が大きくなると考えられる。

次に目的②について、教室と自習室での座席選択傾向は、出入口の位置や教卓の有無といった部屋の構造や用途の違いによって影響を受けること、さらにその影響の度合いが選択者のパーソナリティによって異なることが示された。教室での座席選択傾向とパーソナリティとの関連について、出入口の位置によって座席選択が影響される人は、神経症傾向、および視線に関する不安・恐怖の感情が高いという結果が示された。山内・田邊（2021）は、神経症傾向が高いと視線に関する不安・恐怖も高くなることを示しており、本研究の結果も妥当なものであろう。教室の出入口付近では人の移動が盛んであり、他者が視界に入ることによって不快感情が喚起される可能性が考えられる。しかし、自習室ではこのような傾向は見られていない。自習室における移動あり群にパーソナリティの偏りが見られなかった要因としては、自習をする場においてはパーソナリティの違いにかかわらず出入口付近などの気が散りやすい場所を避ける傾向がある可能性が考えられる。このことは、自習室の移動あり群の人数が多いことから支持できると考える。教室と自習室で異なる結果になったことは、教員の有無や周りにいる受講生の視線からも考察ができる。教室では「授業に集中したいから前方に座る」「前方であれば教員の視線や自分の後ろに座る他者からの視線が不快だから後方に座る」「基本的に授業によいイメージはないから後方に座る」など、出入口以外の要因によるものが大きいのではないだろうか。表2、3からも出入口を基準として座席選択を行う人は教室よりも自習室の方が多くなっていることが分かる。

一方で、自習室では、出入口の影響がある者は周りの「人」よりも「様子」を見る傾向があることが示された。

自習室では基本的に無音で静かなことが多いため周りの人の振る舞いに合わせるよりも、全体的な様子からその場面に適した振る舞いを心がける気持ちが強いのではないだろうか。山内・田邊（2021）の考察でも、周りの様子を見る人はその場の周り全体や集団のつながりを重視しその場にふさわしい行動をとることができる人であり、その状況において場面に適した振る舞いを心がけるため、ミスや失敗を回避する意識が高いのではないかと考えられており、本研究を支持するものと言える。教室と比べて後方が好まれやすい点においても、場の全体の様子を把握することができ、そのうえで自分の振る舞いを決めることができるだろう。

#### ・本研究の課題と今後の展望

本研究では、教室や自習室、新幹線での座席選択傾向とパーソナリティとの関連が示された。しかし、本研究での教室や自習室、新幹線ではある一例としての空間を想定しており、実際には3人ではなく、2人掛けや4人掛の椅子も多く見受けられる。また、座席の間隔や通路幅が異なることや、出入口が正面に向かって左右に位置する場面も想定されるなど、多様な場面を想定しきれていない点で課題が残る。本研究では、新幹線、教室、自習室の3場面を扱ったが、その中でもより細かく部屋を設定すること、また、他の様々な部屋を丁寧に設定して検討することは、個人の好みに合った部屋や空間を提供するという意味で、有意義な研究が期待できる。また、本研究で示唆された教室における座席選択傾向と神経症傾向との関連については、本研究で想定した場面に類似した状況において同様の座席選択行動が見られるかという点に着目して実験的研究を進めていくことが求められる。

さらに、本研究では参加者の利き手に大きな偏りがあったため、利き手を考慮した分析が十分にできていない。Casasanto（2009）は、利き手と感情の連合について実験を行っており、右利きの人は右側を快感情、左側を不快感情と結び付け、左利きの人はその逆の結果になったことを報告している（水平情動メタファ）。このことから、座席を選ぶときにも自分の利き手の影響や、空間の中での左右の影響も考えられる。しかしながら、この水平メタファについては一貫した結果が得られていないと言え、佐々木・米満・山田（2019）は、右側より左側の方が上位になる場合が存在する日本の文化的な背景からも考察している。このように、利き手等の個人特性によって座席選択傾向は異なる可能性があるため、今後は参加者の利き手や文化的な背景を考慮した座席選択の研究を行う必要があるだろう。

加えて、本研究では対象者の属性が統制されておらず、調査協力者は18歳から58歳の年齢幅が見られている。

大学生のように普段から教室で授業を受けたり自習室を利用したりする人とそうでない人とは、教室に対する慣れが違うため座席選択傾向も異なる可能性がある。さらに、大学生のなかでも遅刻の頻度や同じ授業を受けている友人の有無などでも座席選択傾向が異なる可能性があるだろう。今後は、このような対象者の属性や普段の授業態度などを含めて詳細に検討する必要があると考えられる。また、本研究での調査時期は2020年の秋季であり、新型コロナウイルス感染症が流行中であった。新幹線や自習室を使用する頻度、対面での授業を行う頻度などは低下している時期であり、ソーシャルディスタンスを考慮した座席選択という意味では、不十分かもしれない。今後は、新型コロナウイルス感染症からソーシャルディスタンスを考慮した座席選択や部屋の構造についての研究を行う必要もあるだろう。

#### 付記

本研究の一部は、日本認知心理学会第18回大会（於：金沢工業大学、2021年3月3日～4日）で「座席選択行動に与えるパーソナリティの影響」と題して発表した。

#### 引用文献

- Casasanto, D. (2009). Embodiment of abstract concepts: Good and bad in right- and left- handers *Journal of Experimental Psychology: General*, 138, 351-367.
- 濱昌啓子・城仁士 (2001). 大学生の教室における着席行動、神戸大学発達科学部研究紀要 9 (1)、147-158.
- 川西千弘 (2006). 女子大学生の座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性 京都光華女子大学研究紀要、44、211-232.
- 北川歳昭 (1980). 座席行動の研究 (II) —教室内の座席行動と性格特性— 中国短期大学紀要、11、32-45.
- 北川歳昭 (1984). 座席行動の研究 (V) —着席位置の決定因としての学業成績と知能— 中国短期大学紀要、15、61-68.
- 北川歳昭 (1998). 教室の座席行動と個人空間—教師への距離の調整としての学生の着席位置— 実験社会心理学研究、38 (2)、125-135.
- 岡村明治・大井尚行 (2018). 学習環境における座席の選択傾向の個人差についての基礎的検討 人間・環境学会誌、21 (1)、52.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究、21 (1)、40-52.
- 佐々木恭志郎・米満文哉・山田祐樹 (2019). 利き手

- 側の良さ—事前登録されたCasasanto (2009) の直接的追試— 心理学評論、62 (3)、262-271.
- 下鶴幸宏・中野正博 (2008). 座席による学生の勉強意欲の違いの調査研究 バイオメディカル・フィジィ・システム学会誌、10 (2)、149-158.
- 山内裕斗・安藤美華代 (2021). 「見る・追う」及び「見られる・追われる」場面での不快感情の構造に関する探索的検討—DarkTriadに着目して— 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、51、15-28.
- 山内裕斗・小野史典 (2019). 視線に関する不快感情尺度の作成、及びメタ認知との関連 ストレス科学研究、34、65-71.
- 山内裕斗・田邊敏明 (2021). 視線に関する不快感情に及ぼす、ポジティブおよびネガティブな性格特性 山口大学教育学部研究論叢、70、27-33.
- 矢澤久史 (2002). 教室における座席位置と学習意欲、学業成績との関係 東海女子大学紀要、22、109-117.